

ミニ企画展「いきもの探偵」を終えて

はじめに

東京都及び神奈川県内で環境教育に関心がある者で「IP-egg」という有志のサークルをつくり、勉強会などを行っています。IP-eggとは、自然観察会などを行う“インタープリター”の“たまご”という意味です。今回はその活動の一環として、生命の星・地球博物館のミニ企画展コーナーにおいて、「いきもの探偵」(図1)を開催(2014.03.08-04.06)したので報告します。

ハンズオンとは

「ハンズオン」という展示手法は、しばしば「体験型展示」や「参加型展示」などとも呼ばれます。参加者が手を触れたり体を動かしたりし、その動作や作業を通して展示が伝えたいメッセージの本質への理解を深めるものです。20世紀に入ってからドイツやフランスの工業や科学系の博物館で導入しはじめ、その後、こども博物館で積極的に活用されるようになりました(ティム・コールトン, 2000. ハンズ・オンとこれからの博物館. 東海大学出版会)。日本でも科学技術系の博物館では以前から取り入れられていますが、近年では自然系の博物館やビジターセンターでも取り入れられています。1996年にオープンした滋賀県立琵琶湖博物館ではハンズオン展示を積極的に取り入れ話題を呼びました。県内でも、県立ビジターセンターでは、職員が手作りのハンズオン展示を多く設置しています。



図1 「いきもの探偵」展示全景。

私たちの取り組み

本展示では、①サークルメンバーの展示制作技術の向上と、②生き物への関心が低い方々に身近な生き物の面白さを気づかせるきっかけ作りを目的としました。ハンズオン展示を用いることで専門性の高い博物館でも、来館者がより生き物に

親しみと関心が持てるよう心がけました。以下のように対象などを設定しました。

対象：小学生と保護者

ねらい：子どもの好奇心を高め、新しい「発見」を生むように、来館者自身が探偵になって生き物たちの生態に関する謎を解き明かす

扱った生き物：スズメ、ヤモリ、カツオブシムシ、モグラ(市街地(特に横浜市内の郊外)を想定し、日常の中で会うことの多い種類を選んだ)

ハンズオン展示の仕掛け

それぞれの生き物を次のように展示しました。種名の隣の括弧書きは展示につけたタイトル名です。

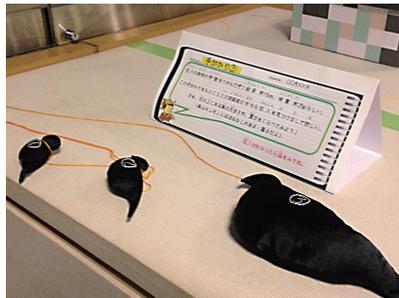


図2 鳥のぬいぐるみ。どれがスズメかわかるか?

スズメ「おうち のっとり事件」(図2)

ツバメの巣を乗っ取った犯人を探します。ヒントになるようスズメの生態に関するパネルを掲示し、スズメ、ハト、キクイタダギの実際の大きさや重さを再現したぬいぐるみを置き、正解のぬいぐるみ(スズメ)を当てます。ツバメの巣を利用することもあるなど、スズメの意外な生態を紹介しました。

ヤモリ「なぞの昆虫バラバラ事件」

虫を食べた犯人探しです。「窓ガラスに張りつく」「目が大きい」「鳴き声がきこえる」などヤモリの態に関するヒントが書かれたパネルを掲示し、ヤモリの模型や資料によりガラスにくっつくことのできる手の構造など、ヤモリのおもしろい生態が分かるような展示になりました。

カツオブシムシ

「密室!? 洋服かじり虫事件」(図3)

虫食いの穴が開いたTシャツに「この穴を開けた犯人を見つけよう」と掲示し、タンスの中からカツオブシムシのカードを



図3 タンスの中からカツオブシムシを探し出そう。



図4 モグラはどれかな?よく見て、触ってみよう。

見つけ出します。正解のカードのほかにカマキリやトンボなど身近な昆虫のカードも混ぜ込み、身近な昆虫の種類やその食性、変態することなどの多様性に触れられるように工夫しました。

モグラ「お庭 穴ボコボコ事件」(図4,5)

モグラ塚の写真を掲示し、モグラ、アカネズミ、ヒミズの剥製を触り、「大きな前あしがある」「毛並みがやわらかい」などのヒントのパネルを手がかりに、庭を荒らした犯人を捜すクイズにしました。同時に本物の坑道から模ったレプリカを展示することで普段見られないモグラの暮らしを実感できるようにしました。

展示全体の配慮と工夫

今回の展示場所は図書室から渡り廊下(橋)にいく通過点にあるため、いかに来館者の足をとめるか、また、ひと目で子ども向けであることがわかるように工夫しました。具体的には、色模造紙をつかって明るくカラフルにしたり、探偵をイメージしたキャラクターをつくり、各パネルに登場させたりしました。

一方で、普段は無人のスペースであるため、安全性と破損防止への配慮が求められました。ハンズオンの土台は倒れにくくしっかりとしたもの博物館からお借

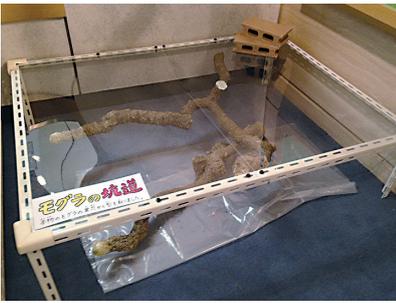


図5 モグラの坑道。知られざる地面の下の世界を見てみよう。

りし、モグラ坑道のレプリカでは土台の角にクッションを張り付けました。ぬいぐるみなどは、紐で土台と結びつけました。

モグラやネズミ類の剥製では、壊されない工夫と、毛並みを触ってほしいというこちらの目的とどこで折り合いをつけるかが課題になり、結局蓋のない透明ケース内に剥製を括り止め、透明ケースも土台に貼り付けることにしました。

当初は色鉛筆をつかった色塗りコーナーも検討しましたが、色鉛筆の紛失と落書き防止のため断念しました。

利用者の反応

本展示ではアンケートを実施しませんでした。IP-eggのメンバーが利用者の様子を観察しました。

観察を行ったのは4月6日の15:30頃から16:00頃まで。この日は春休み最後の土日であり博物館全体は多くの来館者で賑わっていました。特に、小学生程度と思われる家族連れが半数以上を占めているようでした(図6)。

観察した来館者は3組でその内訳は、①男の子1名(小学3～6年生程度)②家族連れ(母、小学5～6年生程度の姉と小学2～3年生程度の妹)③女の子2人組み(小学3～4年生程度)でした。このほか、大人のグループ数組が通過しましたが、通り過ぎただけで展示は見ませんでした。

各来館者の様子は、①は非常に熱心にハンズオン展示に取り組み、特にモグラの剥製に興味があった様子で10分ほど剥製に触ったり坑道を観察したりしていました。②は、まずは母親が展示に気づき、娘たちにやってみよう誘いかけてきました。母親が解説文を読み娘さん2人がハンズオンに取組んでいきました。③

は、男の子ほど時間はかけていませんでしたが、熱心にモグラの剥製をなでていきました。

展示は入り口と出口を設定し、端の展示から順番に進んで行くように導線を設けていましたが、どの来館者も目についた展示から取りかかり、その周りの展示に移るといった遊び方をしていました。

また、後日博物館職員さんから伺ったお話では、展示で遊んだ子どもが図書室に調べ物に来たそうです。



図6 展示にとりくむ親子の様子。

ハンズオン展示の効果

子どもの興味を引くという点においては、大きく効果を上げられたように感じます。ガラスケースを飛び出して、さも「触ってごらん」と展示物が置いてある様子やカラフルな色使いが子どもの目を引いたようです。また、来館者の観察で特に印象強かったことは親が子どもに、やってみようとしたことでした。子ども向けであることが、親の関心を引くことになったようです。

制作者の意図としては、「身近な動物への関心を高めること」でしたが、それがどの程度達成できたか、定量的な判断はできませんでした。

しかし、写真や文章で書いた解説パネルはほとんど読まれることなく、一方で工作物は熱心に遊んでもらえたことから、実際に触る、探すといった動作をとおして参加者自身が「考える時間」を与えることができたと思います。解説パネルで補おうとした知識や探偵ごっこというシチュエーションの説明は伝わりにくかったかもしれませんが、これもハンズオン展示の“仕掛けのおもしろさ”の効果だと感じました。

頑丈さについて

今回の展示で最大の不安要因であった「スタッフが常駐しない」という状況の中、壊れた展示もありました。鳥のぬいぐるみが破かれていたこと、虫のカードが

紛失したことや糊付けした部分が剥がれたことなどです。壊れてしまっただけで、伝えたいメッセージも伝わらず、安全上も問題であるため、頑丈な展示にすることの大切さを改めて実感しました。

人による解説との違い

私たちメンバーの何人かは、普段から人前で解説することを仕事にしています。相手が目の前にいる際には、参加者の反応や興味の程度などがつぶさにうかがえるので、途中で話のレベルを下げたり、考える時間を調整したりすることができず、どこに興味をもつか、どんな学びを得るかが、参加者自身に委ねられる割合が多くなります。

前出のコールトン(2000)によれば、展示の効果は物理的な環境のほかに、利用者の既存知識、博物館に対する期待、一緒に館に来た人の影響があり、展示デザインを行う際は、どんな人がどんな利用方法をするかを明確に想定しておくことと、同じく明確な目標設定が必要であると言われています。このことから、メッセージの伝わり方が、特に参加者の遊び方に委ねられるハンズオンという展示では、よりねらいをシンプルに設定しておく必要性を強く感じました。

博物館と市民団体のかかわりについて

本展示の内容を環境教育に関する全国フォーラムである清里ミーティング2014と環境教育ミーティング2014にて発表したところ、他の博物館から、巡回展示はできないかという質問をいただきました。質問の背景には博物館での人手不足があり、巡回できるパッケージ展示にはどうかと提案も併せて頂きました。博物館の活性化と市民団体の活動発表の場という視点から、今後は様々な団体と連携した展示室の更新も考えられるのではないかと感じました。

謝辞

本展示を行うにあたり、大島光春・広谷浩子両学芸員、破損した展示物を修復してくださった友の会の皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。